

「音楽科61周年」

2024・6・26 重枝 一郎

音楽科の学力というものを考えるとき、歌う、楽器を奏でるなどの表現・技能や五線譜から音楽を読み取る力や和音を聞き分ける力などが頭に浮かぶ。しかし、この事柄は、コンピテンシーの問題ではなくて、具体的なスキルになると思う。このスキルは、人が社会の一員として生きていくために最低限必要な力というわけではない。なのに、義務教育をはじめとする学校教育の中で、音楽科教育、音楽教育があるということはすごいことだと思う。なぜなら、音楽科は人が育ち生きていく上で欠くことのできないものを獲得することができるからである。

では、何を獲得することができるのか？

私は、教育界でいつも話題となる学力問題を総合的に論じるとき、その一つの側面として、広い意味でのコミュニケーション力の不足があると考えている。話す力、読む力、書く力は「表れ」として捉えやすく、そういう力をつけるための指導については、かなり優れたノウハウの蓄積があると思う。しかしながら、それは、広い意味でのコミュニケーション力のすべてではない。広い意味でのコミュニケーション力には、様々な状況判断や推論が含まれる。その根拠となるものには、多くの場合、直感としか言いようがないもので、明示的に説明できない。これが「感性」と言われるものになる。音楽科教育が寄与することの一つは、そうした広義のコミュニケーション力を育てることだと考える。よく言われる「豊かな感性」というものは、本校では音楽科教育をはじめとする芸術教育や宗教教育の中で育まれていると思う。そういう学校風土が、本校の存在意義の一つでもある。

様々な調査研究において、音楽で培った力が、他教科、他の活動、人間関係づくりなどにも良い影響を及ぼすという報告はよく見るところである。音楽科は、個としての音楽力とは別に、音楽そのものに教育的意義があるということである。

【「響創コース」の意義につなげる】

では、音楽科の固有性とは一体何になるのか。

私は、「音」が中心的な媒体となって、「音」を介して人とつながっていくことだと思う。「音」はもちろん物理的には振動である。しかし、「聴く」という聴覚だけの問題ではない。「音」は本来、向こうから自分に触れに来るものだと思う。触れられるということは、同時に触れることでもある。「音」を媒体として、誰かと一緒に何かを行うということは、人と人が深いところで触れ合っているということに他ならないと思う。それは、「私」から「私たち」というつながりを生み出す。

音楽科は個々人に音楽の力を付けるということだけでなく、もっと基層の部分である人間の生存や生活・成長に不可欠である「共に」という在り様を教えてくれる。

ここまで「音楽科教育とコミュニケーション力」について述べてみた。このことを、本校の「学校力」を高めること、教師の「教育力」を高めること、そして生徒の「人間力」を豊かに育むことにつなげていけたらいいと思う。

本校には「大切なひとり」というシンボルワードがある。これは、生徒一人一人に自分の存在価値を持たせるための言葉である。ここで「大切な音楽科」という言葉を発信する。「大切なひとり」と同様に、本校の存在価値を植え付けてくれる音楽科を今後とも**全職員**で発展させていく。

音楽科の先生は、2学期には、公立中の合唱コンの審査員として数校行く。
また、「Nコン」メンバーの生徒が、太宰府中の合唱コンの指導に行く。
そして、本日、「エリザベト音楽大学と教育連携協定に関する協定書」の調印式を行った。